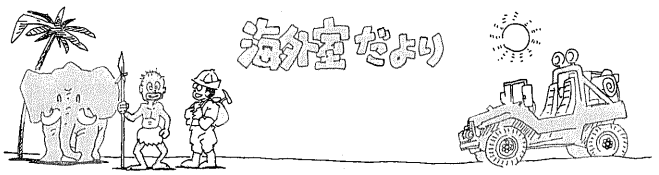


No. 4

国際研究協力の現状と展望　本年度のITIT国際シンポジウムが標記のテーマで　来る12月5～6日に工業技術院筑波研究センター共用講堂で開かれます．　ITIT事業と開連の深い　主として発展途上国の研究所の所長クラスの方7名を招待し　国際研究協力のあり方およびわが国への要望など　忌憚のない話を聞く予定です．　当所担当では　中国地質科学院地質力学研究所から崔盛芹所長を招へいすることになっています．　入場自由ですので　関心をお持ちの方は多数御参加下さい．

（田口）

科学万博 VIP ラッシュ　2,000万人を超す来訪者　思わくはずれの倒産続出　光と影を残して国際科学博覧会は終了したが　日本の先端技術と「つくば」の名を世界に拡めたことは大きな功績であろう．

工業技術院筑波管理事務所も　余波の見物客の殺到に備え　外周道路に駐車の線引きまでして待ち構えていたが　幸か不幸か全くの空振りに終ってしまった．

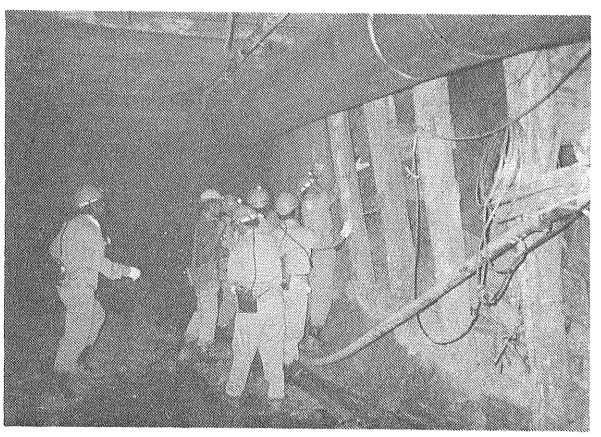
6か月の会期中　参加47か国のナショナルデーに来賓の国王大臣　大使以外にも多数のVIPが来場され　ロボット　エレクトロニクスだけではない日本の先進技術に深い感銘をうけて帰られたようだ．　万博協会が用意した8,000枚のVIP特別入場券が会期半ばで消化してしまったことからも　その人気は察せられる．　私自身も数回つとめた地質調査所来訪のVIPの案内の中で　8月末に開催された国連ESCAP／RMRDC管理理事代表22名の案内が　やはり最大のイベントだった．　おりしも　会期末の駆け込みVIPラッシュの調整に苦慮していた協会儀典室は　10名　3か所に限ると回答してきた．　VIPの資格は大臣　次官　大使または同格以上とされ　管理理事国各代表1名だけを認めたのである．　特別口からお土産つきで入るVIPと　炎天下　延々と並ぶ一般とでは天と地の差がある．　公平を期するため管理理事国グループと国連グループの半分にわけ　それぞれ1館ずつ交替してもらう苦肉の策で納得してもらった．　会期中は　来訪外人の案内などで24回入場し南北1.5キロ　東西1キロの会場を毎度2～3往復しているうちに　脚がすっかり鍛えられ　少々の暑さにも閉口たれぬ健脚になったのは　私にとって万博最大の収穫であった．（桑形）

HELP HELP !!（パートⅡ）　最近　ますます大型化したジェット機は短時間で　しかも一度に大量の人間を遠く離れた場所へ輸送することができます．　このことは　伝染性の風土病の多発する地域に生活していた人や旅行した人をも簡単にわが国へ運べることを意味します．　入国の際　検疫官が各自の健康状態をいちいち検査することは不可能ですから　身体の不調は本人の申告でしかチェックしようがありません．　感染してから発病までの潜伏期間が長い病気の場合は一番厄介です．　入国時には一見健康そのものであった人が　入国後に症状が現われ大騒動となり　しばしばマスコミを賑わせることがあります．　しかし　そんなことは自分達にはまったく関係のないことだと　以前にはタカをくくっていました．

先日　熱帯のある国からやって来た人を東北地方の山の中へ調査のために案内した時のことです．　ある晩　彼がしきりに頭痛と悪寒を訴えるものですから　当初寒い日本へやって来て風邪をひいたものと思い解熱剤を買い与えたのです．　翌朝具合を聞いてみると大丈夫だというのでフィールドへつれて行くと　案の上グッタリしてしまうといった状態．　よくよく観察し話を総合してみると　どうも風邪ではなくマラリヤであるらしい．　急いで病院につれて行きましたが　あいにく診察に出て来たのは産婦人科医．　たとえ内科の名医がいたとしてもわが国の地方都市でマラリヤの治療などできる話ではありません．　結局　彼の調査計画を中途で断念．　彼の大使館と連絡を取った上　急いで帰京させることにしました．　帰京後病院で応急処置を受けた後　大使館員が彼につきそって無事帰国させたとのことです．

スピード化時代の今日　私たちの予期しないこのような事態が　今後突発的に生じないということは誰にも断言できません．　読者のみなさん　海外からの来訪者の健康管理にはとくに注意を払う必要がありますよ．　またまた老婆心ながら．

（田口）



黒鉱ワークショップの現地討論風景

9月5日深沢鉱山坑内における黒鉱堆積状況の観察．　地下500mの坑内は気温約40°C　湿度100%で蒸し風呂のよう．　途上国を中心とするワークショップ参加者は　初めての坑内体験で汗をグッショリかきながらも　充実した討論を行った．